

英語イントネーション体系についての考察

澤村香代子

1. 序論

イントネーションが発話において果たす役割は重要なもので、言葉以上のことを伝える働きがあり、話者はイントネーションを駆使して聞き手によりわかりやすく情報を伝えることができる。多くの研究者がその役割についての体系付けを試みているが、その中でも Tench (1996) による理論は明確で、わかりやすく、しかも緻密なものである。

本論文では、他の研究者による英語のイントネーション（以下：イントネーション）の体系付けと Tench (1996) のイントネーション体系を紹介し、Tench (1996) の理論と他の理論との違いを述べる。さらに Tench (1996) のイントネーション体系の有効性をいくつかの発話を分析することにより検証していく。本論文がこれからのイントネーション研究になんらかの貢献があればと考えている。

2. 先行文献研究

ここでは、イントネーションについて歴史的観点から考察する。主に1900年代の研究について考察していくわけであるが、研究の傾向にも変化がでてきているため、1900年代を3つの時代に分けて考察していこうと思う。1900年から1950年まで、1950年から1965年まで、そして1965年か

ら現在までの研究について考察していく。

2.1 1900年から1950年

イギリス英語のイントネーション研究は Sweet (1906) に始まるといってよい。彼は平坦 (level), 上昇 (rising), 下降 (falling) の3つの音調を基本の音調とし, 平坦調は *well* など考えをまとめている時 (meditation) に使われ, 上昇調は *Are you ready?* などの質問 (question), 確信のない陳述 (doubtful hesitating statements) の時にあらわれ, 下降調は *yes, I am* などの返答 (answers), 命令 (command), 独断的な主張 (dogmatic assertions) などに使われる音調であるとしている。これに複合音調として下降上昇調 (compound rising), 上昇下降調 (compound falling) を挙げている。下降上昇調は *take care!* など, 警告 (warning) の発話の時に用いられ, 上昇下降調は *oh!* や *oh really!* などの皮肉 (sarcasm) を含んでいる時などに用いられるとしている。これらの音調に加えて, さらにピッチ (key) についての言及をしている。高 (high), 中 (middle), 低 (low) のピッチの高さを設定し, それぞれのピッチの特徴について述べている。中のピッチは無標で特別な意味をもたないもので, 高のピッチは活動的な (energetic), 喜びに満ちた (joyful) 感情を表し, 低のピッチは悲しみ (sadness) やまじめな (solemnity) 態度を示すとされている。

Armstrong and Ward (1931) は, 発話を非強調文 (Unemphatic Sentences) と強調文 (Emphatic Sentences) の2つに大きく分け, それぞれの中で Tune I (上昇調), Tune II (下降調) と音調を分けている。これらの音調を非強調文の時と, 強調文の時とに分けて使われる状況の違いを挙げている。

Pike (1945) は, 英語のイントネーションは本来備わっている意味 (lexical meaning) に重ね合わせるものであるとして, 話者の態度 (attitude) に注目している。そして, この態度について音調パターンごとにかなり細かい意味付けを行っている。

2.2 1950年から1965年

この時期における代表的なイントネーション研究は Kingdon (1958) によるものであろう。Kingdon は音調に関して、静的音調 (static tones) と動的音調 (kinetic tones) に分けた。静的音調とは平坦調、動的音調とは、上昇調、下降調、下降上昇調の3つである。ピッチに関しては動的、静的それぞれ高、低2つのタイプに分けた。これを普通 (normal) の音調として捉え、さらに強調 (emphatic) の音調を設けてある。平坦調も同様に普通の音調と、強調の音調がある。強調の音調は核音節におけるピッチの変動が極端に大きかったり、小さかったりするものである。強調の音調は話者の心的態度や、特別な状況を示す時に使用されるとしている。

上記のような音調を基本に、Kingdon はさらに文単位でイントネーションを説明している。質問 (questions), 陳述 (statements), 命令 (imperatives), 挨拶 (salutations), 謝罪 (apologies), 感嘆 (exclamations) の6つの文タイプについてそれぞれ、いろいろな状況を設定し、状況ごとにイントネーションがどのように現われているのか、詳しく記述している。品詞に関しては、普通、文強勢 (sentence stress) を受ける品詞、文強勢を受けない品詞を説明している。

Schubiger (1958) は心的態度に重点をおいた研究をしている。文タイプごとに基本パターン (Basic Patterns) と特別な含みを伴ったパターン (Patterns with Specific Connotations) とに分け、特別な含みを伴ったパターンのほうが心的態度を示すとして例文を挙げ、心的態度を明記している。

2.3 1965年から現在まで

O'Connor and Arnold (1973) では、Kingdon の後を受け継いで、イントネーションについてより深いところまで考察を進めている。音調を低落下型 (The Low Drop), 高落下型 (The High Drop), 離陸型 (The Take-Off), 低バウンド型 (The Low Bounce), スイッチバック型 (The Switchback), 幅

跳び型 (The Long Jump), 高バウンド型 (The High Bounce), ジャックナイフ型 (The Jackknife), 高飛び込み型 (The High Dive), テラス型 (The Terrace) の 10 種類に分けて各音調それぞれについて文タイプごとに考察し心的態度を明示するという段階を踏んでいる。

これに対し, Halliday (1967) は, 当時, イントネーションを文法的枠組みで心的態度を記述するものが多かった中で, イントネーションが文法的意味に直接関わるものとして捉えている。Halliday のこのイントネーション研究はまったく新しいアプローチであった。イントネーションは時制や, 数, 法と同様に文法的な働きをするもので, 発話の文法的意味を変えるものであるということである。Halliday はイントネーションには, 文法的意味をなす *tonality* (音調群の境界の設定), *tonicity* (核音節の選択), *tone* (音調の選択) の 3 つの働きがあるとしている。この 3 つの働きは互いに独立したもので, それぞれの文法的役割を果たしているということである。

このようにイントネーション研究は主に 1900 年代に始まった。1900 年から 1950 年までの研究は現象を記述する研究であったといつてよい。その記述をもとに後の研究者は体系付けることを試みてきた。体系付けには文タイプごとに音調と心的態度を記述するという方法がとられている。しかしより詳しい研究が進むにつれ, 音調の種類も増え, 心的態度も研究者によってさまざまな種類が挙げられ, 明確な意味の対立を見いだすことは難しく, より複雑なものとなっていった。そのような中で Halliday はイントネーションについてより言語学的な研究を提案したのである。Tonality, *tonicity*, *tones* の 3 つが発話の意味を変えるというもので, 明確な意味の対立があり, 新たなイントネーションの働きの発見であったといつてよい。この発見は Tench (1990, 1996) によってさらに発展されていく。

3. Paul Tench のイントネーション理論

ここでは, Tench (1996) の理論について詳しく説明していく。

3.1 イントネーションの機能

Tench (1996) は 6 つの分野を挙げてイントネーションの機能を説明している。情報の組織化 (The organization of information), 意思伝達機能の実現 (The realization of communicative functions), 態度の表示 (The expression of attitude), 統語構造 (Syntactic structure), テキスト構造 (Textual structure), 発話スタイルの特定化 (The identification of speech styles) の 6 つである。本章において紹介されている発話例はすべて Tench (1996) からの抜粋である。

3.1.1 情報の組織化 (The organization of information)

話者は聞き手に情報を伝える際にイントネーションを駆使している。まず tonality (以下: トナリティ) によって 1 つのイントネーション単位の中に 1 つの情報を含めて情報の単位をつくり, tonicity (以下: トニシティ) によって特に伝えたい, 大切な情報に焦点を置き, tones (以下: トーンズ) によって情報をより詳しいものとする。

次のような自然な発話において話者がどのように情報を処理していくかを見ていくことにする。(+ はポーズを表している)

I regret + putting the people out of the out of the South Side and central Edinburgh you know ++ I don't think ++ especially after the war you know after the ++ war when they started the ++ redevelopment and the ++ well the authority more or less made it that everybody was to go outside you know ++ the gardens and houses but...

(Tench, 1996, p.5; cited in Brown, Currie and Kenworthy, 1980)

まず主要な話題が述べられている。(下線は核音調を示している)

a: I regret + putting the people out of the out of the South Side and central

Edinburgh

聞き手に次に言うことを信用してもらえらるるようアピールするよう **b** を言う。

b: you know

続けようとするが、新しい考えが浮かんだので発話を *I don't think* まで言って止める。

c: ++ I don't think

新しく思いついたことを言う。この場合前に言ったことについてより詳しく言おうとしている。

d: ++ especially after the war you know

前に言ったことを繰り返しながら、次に伝えることの言い方を考え、言い方を見つけて言う。*redevelopment* の前のポーズは話者がこの言葉に決定するのが困難だったことがうかがえる。

e: after the ++ war when they started the ++ redevelopment

redevelopment という言葉が浮かんだものの、次の言葉が見つからず、続けて言うことを止める。

f: and the

g: ++ well the authority more or less made it

redevelopment の続きではなく次の新しい発話が続く。

h: that everybody was to go outside

聞き手によく聞いてもらえらるるようまたアピールする。

i: you know

新しいポイントに移る。

j: ++ the gardens and houses

このように話者は考えながら発話する。そのため、発話の途中でしばしばポーズをとって言い方を考えたり、時には言いかけて止めたりするのである。ポーズではトナリテイがかかっている。

上の例で見てきたのは発話の進め方におけるイントネーションの役割であったが、もう1つ重要なことがある。話者がどのような内容を伝えたか

ということである。話者がこの一連の発話においてどのようなことを言いたかったのか、またどのようなことを強調したかったのかということである。これにはトニシティがかかわっている。しばしば言われるものとして、新情報、旧情報というものがある。旧情報は話者も聞き手も知っていることなので、普通、核が置かれることはない。新情報は聞き手の知らないことなので、核が置かれやすい。これに関してはトニシティのところで詳しく述べることにする。発話 a の *people* は他の *South Side* や *central Edinburgh* よりも際立っているということがわかる。核のあとの際立たない語は話者が旧情報とみなしている事柄で、すでに話題にされたということが予想される。発話 d の *war* は際立っている、つまり核であるが、発話 e のほうは旧情報になるので際立たない。トニシティによって話者が伝えたい情報の中心が表される。聞き手がどこを特に注意して聞けばよいのかということが情報の新旧を表すことによってわかるようになっている。

3.1.2 意思伝達機能の実現 (The realization of communicative function)

意思伝達機能というのは、話者と聞き手とのやりとりにおける機能である。話者が聞き手に何かを述べているのか、訊ねているのか、命令しているのか、懇願しているのか、挨拶をしているのか、感謝しているのかなどという話者の意思を聞き手に伝えるということにイントネーションがかかわっている。この機能では特にトーンズがかかわってくる。情報の組織化が「何が言われているのか」ということに答えるものであり、意思伝達機能の実現は「なぜそう言われているのか」ということに答えるものである。次の発話を見つめる。下線部は核音節を示し、(＼)は下降調を、(／)は上昇調を示す。

(3.1a) (John's going out), \ isn't he

(3.1b) (John's going out), / isn't he

(3.1a) の発話において、話者は *John's going out* ということを確認して発話しているということになり、(3.1b) の発話ならば話者は *John's going out* ということに関して、確信をもたないで発話しているということになる。Tench (1996) によれば、主要な情報を含んだ下降調は話者が確信していることや話者の意思表示などを表し、話者主体の音調となる。発話の内容が話者の中で処理されているような場合に使われる音調である。上昇調は話者が確信していないことや、聞き手に尋ねたり、聞き手に決定してもらったりなどの聞き手主体の音調としている。結果を聞き手にゆだねている音調である。次の発話例は話者主体、聞き手主体の典型的な例である。

(3.2a) Shut the \ window

(3.2b) Shut the / window

(3.2a) のように下降調の場合には話者主体であり、「窓を閉めなさい」といった命令の発話になるが、(3.2b) の上昇調の場合には聞き手主体で「窓を閉めてくれませんか」という意味になり、(3.2a) よりは丁寧な発話になる。このように語順は同じでも音調の違いで、聞き手にまったく違った印象を与えることになる。

3.1.3 態度の表示 (The expression of attitude)

態度の表示はいままでイントネーションの機能の中でも特に広く研究されてきた分野で心的態度機能と呼ばれてきたものである。これがイントネーションの働きの中でいちばん重要であるとされてきたのである。話者と聞き手のやりとりにおいて、心的態度というのはいちばん知覚されやすいことの1つであると言える。「何を言ったか」ではなく、「どう言ったか」ということに目が向けられている。話者が怒っているのか、やさしく言っているのか、丁寧に言っているのかといったようなことを示す働きである。「言い方の問題だ」などと言われるのはこの心的態度のことである。そのた

め、この分野は以前から広く研究されてきたのである。しばしば、心的態度機能は文法機能と一緒に考えられることが多いが、文法機能とは切り離して考える必要がある。

3.1.4 統語構造 (Syntactic structure)

統語構造の働きはあるイントネーションが意味を特定する統語的パターンがあるということである。関係代名詞の発話においてはイントネーションのトナリティによって制限、非制限の区別をつける。

(3.3a) My brother who lives in Nairobi...

(3.3b) My brother | who lives in Nairobi...

これが、書かれたものであるならば、非制限用法の場合 *who* の前にカンマが置かれるが、発話の場合はイントネーションのトナリティがその役割を果たしているのである。(3.3a) は“ナイロビに住んでいる兄弟が…”という発話になり、(3.3b) は“私の兄弟ですが、ナイロビに住んでいるんですけど…”という発話になる。

3.1.5 テキスト構造 (Textual structure)

イントネーションは単位ごとに働くだけではない。いくつものイントネーション単位 (intonation units) からなる長い発話においても働く。一連の発話においてイントネーションは発話の始まり、終わり、話題の転換などのサインを出している。

普通1つのイントネーション単位の中に1つの情報が含まれる。このイントネーション単位を完結単位 (complete unit) という。しかし、自然な発話では話者は考えながら話をするため、言いかけて止める放棄単位 (abandoned unit) も含まれることがある。この放棄単位はイントネーション

単位の中に情報が含まれないものである。自然な発話はこのような完結単位や放棄単位から成る。このような一見バラバラな発話は話題や、文法の働き、イントネーションによって結び付けられている。

3.1.6 発話スタイルの特定化 (The identification of speech styles)

発話にはいろいろなジャンルがある。そのさまざまなジャンルの中で話者は常に同じ話し方をするのではなく、その場の環境によって話し方を変えている。テンポやリズム、声の大きさやイントネーションが発話のスタイルによって変わる。ある言語行為に伴って感じられる音の響きは一般的に韻律構成 (prosodic composition) として知られている。ニュース、砕けた会話、演説、朗読といったものはそれぞれイントネーションに特徴がある。発話を聞いているだけで、話されている状況がわかるのはそのためである。イントネーションはいろいろなジャンルの発話の韻律構成を特定する主要な要素となっている。

3.2 イントネーションの構造

イントネーションの構造は音調群 (tone-unit, tone-group) の単位で説明される。音調群とは前頭部 (pre-head), 頭部 (head), 核 (tonic, nucleus), 尾部 (tail) から成る。前頭部は発話の最初の無強勢音節をいう。頭部は発話の最初に位置する強勢音節のことをいう。核は強勢音節とともに、音調の変化が起こる音節のことをいう。尾部は核に続く音節のことをいう。前頭部、尾部は発話によってはないこともある。もし、核音節のみの発話の場合、その音節は最初の強勢音節でもある為、頭部でもあり、核でもある。

Tench (1996) では、発話におけるイントネーションの構造を次のような発話例をもとに説明している。下線部は核音節を示し、(l)は強勢を示し、(|)は音調群の境界を示す。

1. A |dog is a |man's |best |friend
2. |Dogs are |men's |best |friends
3. |Dogs are men's best friends
4. |yes | they |are | aren't they

これらを音調群の表にまとめると以下のようになる。(4 は音調群が 3 つになる為, “yes” を 4-1 とし, “they are” を 4-2 とし, “aren't they” を 4-3 とした。)

	pre-head	head	tonic / nucleus	tail
1	A	dog is a man's best	friend	
2		Dogs are men's best	friends	
3			Dogs	are men's best friends
4-1			yes	
4-2	they		are	
4-3			aren't	they

(Tench, 1996, p.14)

3.3 トナリティ、トニシティ、トーンズ

Tench (1996) は Halliday (1967) の概念であるトナリティ、トニシティ、トーンズを用いてイントネーションを説明している。トナリティは音調群の境界を設定するはたらきがある。設定された音調は話者の伝えたい情報の単位と一致する。トニシティは、発話中のある音節に核を置くことによって情報の焦点を決定するという働きがある。トーンズは、音調群の中で、音調を変化させることによって、与えられた情報をより詳しいものにする働きがある。これらの 3 つは話者によって設定され、設定の仕方によっては同じ文でも意味が変わるとしている。

3.3.1 トナリティ

Tench (1996) は音調群のことをイントネーション単位 (intonation unit) と呼んでいる。以下ではイントネーション単位と呼ぶことにする。一連の発話において、トナリティはイントネーション単位と情報の単位を一致させることによって情報の処理をする。イントネーション単位は話者によって決定される。同じ内容を同じ語で発話しても話者によってイントネーション単位の数は異なることが多い。Tench (1996) はイントネーション単位の多くは文レベルの節 (clause) と一致するとしている。一致しているものをニュートラルトナリティ (neutral tonality) とし、一致しないものをマークトナリティ (marked tonality) と呼んでいる。

マークトナリティは、1つのイントネーション単位の中に2つ（またはそれ以上）の節が存在していたり、1つの節の中に、2つ（またはそれ以上）のイントネーション単位が存在していたりするものである。次の2つの例がマークトナリティである。

(3.4) I'm going to town | this morning

この場合、*this morning* はあとで思いついた付け足しの発話であり、1つの節なのに2つのイントネーション単位になったものである。意味は「町へ行くんだよ、今朝ね」といった感じになるだろう。

(3.5) He did. I saw it.

この場合は、*He did* が旧情報として速く、一気に発話されていて、2つめの節の *I saw it.* が新情報となる。話者は前に話題になった「彼はやった」ということではなく、「わたしは見たんだ」ということを伝えたかったのである。そのために、1つのイントネーション単位の中に2つの節が含まれたわけである。マークトナリティは節とイントネーション単位が一致し

ないが、イントネーション単位と情報の単位が一致するという事は変わらない。

また、発話の環境が様々であるようにイントネーション単位の区切り方も様々であるといえる。Tench (1996) によると、ニュースでは1分間に70～80のイントネーション単位が記録されているという。これはキャスターが限られた時間でできるだけ多くの情報を伝えようとするため、情報の単位と一致しているイントネーション単位が多くなっているのである。それに対して、リラックスした状況では、イントネーション単位は1分間に約25ということである。

次の2つはトナリティによって発話の意味が変わる例である。

(3.6a) I didn't come | because he told me

(3.6b) I didn't come because he told me

この場合、トナリティによってどこまでを否定しているのか、否定の領域を決定している例である。(3.6a)は「彼が私にそう言ったので私は来なかった」となり、話者は行かなかったことになるが、(3.6b)の場合には「彼が私にそう言ったから来たわけではない」となり、話者は行ったことになる。このようにトナリティによって意味が変わるのである。

3.3.2 トニシティ

トニシティは、発話中のある音節に核を置くことによって情報の焦点を決定するという働きがある。多くの発話の場合、核の置かれる場所はだいたいイントネーション単位内の最後のレキシカルアイテムⁱであるとされている。この場合のレキシカルアイテムは意味的に重要なものを指し、1語とは限らず、複合語のように2語以上からなるものも含まれる。レキシカルアイテムに対して、グラマティカルアイテム (grammatical item)ⁱⁱというものがある。このグラマティカルアイテムというのは文の構造上、重要なア

アイテムを指す。代名詞，冠詞，前置詞，助動詞などがそうである。Tench (1990) によるニュースのデータでは発話の 88 パーセントがイントネーション単位の最後のレキシカルアイテムに核が置かれるという結果が出ている。このようなトニシティのパターンをニュートラルトニシティ (neutral tonicity) という。ニュートラルトニシティはごく普通の発話であるといえる。発話において，重要な情報は最後に言われるのが普通であるとされている。また新情報は旧情報よりも比較的あとに置かれるということが言われている。上記のTenchのデータを見ても分かるように多くの発話がニュートラルトニシティなのである。これに対し，イントネーション単位の最後のレキシカルアイテムに核が置かれないものをマークトニシティ (marked tonicity) と呼んでいる。(3.7b) から (3.7e) までの発話はマークトニシティである。

(3.7a) Can you break an apple in two ?

(3.7b) Can you break an apple in two ?

(3.7c) Can you break an apple in two ?

(3.7d) Can you break an apple in two ?

(3.7e) Can you break an apple in two ?

まず，(3.7a) は *Can* が高いピッチで *you break an apple in* でだんだん下がっていく。そして *two* で上昇する。この *two* は核であり，前で挙げたような特徴を持つ。(3.7b) は *apple* に核が置かれている。この場合 *two* は旧情報であると考えられる。もうすでに何かを 2 つに割るということは話題になっており，新しい情報の焦点は何を割るかということに置かれている。(3.7c) は割るという動作を強調している発話となる。他の動作ではなく，割るということをお願いするためにここに核が置かれている。(3.7d) は *you* に核を置くことによって，他の誰かと区別している。(3.7e) はリンゴを 2 つに割れるかどうかの能力について訊いているために *Can* に核が置かれている。核の置かれる場所が変わると情報の焦点も変わる。同じ語順の発話で

も、どこに核を置くかによって違う意味を持った発話になる。

(3.8a) Shoot John

(3.8b) Shoot John

これは、トニシティによって意味が変わる例である。情報の焦点を Shoot に置く (3.8a) の場合、意味は「撃て、ジョン」となるが、焦点を John に置く (3.8b) の場合には「ジョンを撃て」となる。

3.3.3 トーンズ

トーンズは、音調群の中で音調を変化させることによって、与えられた情報をより詳しくする働きがある。Tench (1996) はトーンズを第一次音調 (primary tones) と第二次音調 (secondary tones) に分けている。第一次音調は核における基本的な音調のことで、下降調、上昇調、下降上昇調などの音調の種類をいう。それに対して第二次音調は第一次音調よりも細かく、下降や上昇の度合いや、核以外の前頭部、頭部などを含んでいる。本論文ではトーンズに関しては第一次音調の現象のみを扱うこととする。トーンズは、情報の観点から、また意思伝達の観点からではその音調がどのような性質のものなのかということが変わってくる。情報の観点からでは、下降調は主情報 (major), 上昇調は発話の途中の場合に未完 (incomplete), 発話の最後では副情報 (minor), 下降上昇調はテーマを目立たせる (theme highlighted) ということと、話者が含み (implication) を持っているということを示すとされている。これを Tench は、情報のステータス (status) と呼んでいる。以下の例は音調によって意味が変わる例である。(v)は下降上昇調を示す。

(3.9a) They don't admit \ any students

(3.9b) They don't admit v any students

(3.9a) は情報の観点から主情報であり、「彼らはどんな学生も許可しない」となり、(3.9b) は下降上昇調が現われているため、含みとなり、意味は「彼らはどんな学生も認めないわけではない」となる。

意思伝達においては下降調と上昇調の 2 つの音調によって話者と聞き手の関係性を表しているとしている。話者は陳述しているのか、質問しているのか、命令しているのか、依頼しているのかといったようなことである。話者と聞き手の関係性において、下降調と上昇調の 2 つの音調によってかなりの部分が説明されうるというのが Tench (1996) の考えである。まず、下降調を話者と聞き手の関係性においてドミナンス (dominance) とし、上昇調をデファランス (deference) とする。ドミナンスは広い意味で、自分が知っていること、自分主体ということであり、デファランスは自分の知らないこと、相手依存、相手を思いやる気持ちということである。

(3.2a) Shut the \ window

(3.2b) Shut the / window

(3.2a) の場合には下降調を伴っているため、ドミナンスであり、意味は「窓を閉めなさい」となる。(3.2b) は上昇調を伴っているため、デファランスであり、「窓を閉めてくれませんか」といった意味になる。

4. Tench の理論の検証

本章では、上に述べた Tench の理論をもとに実際の発話を分析し、それぞれの現象を Tench の理論によって説明しきれぬのかどうかを発話分析することによって検証する。ここでは物語の朗読、インタビュー、ニュースの 3 つのジャンルを分析した。すべてイギリス英語である。分析はトナリティ、トニシティ、トーンズを考慮に入れ、イントネーション単位の境界を見つけ、核音調の生ずる情報の焦点を発見し、音調の種類を下降調、上

昇調，下降上昇調のうちどれであるかを聞き取る。その結果が Tench (1996) の理論で説明しきれぬのかどうかを検証する。下線は核音調，(|) はイントネーション単位の境界，(\) は下降調，(/) は上昇調を，(V) は下降上昇調を示している。

4.1 物語の朗読

1	2	3	4
Once upon a <u>time</u> there were <u>four</u> little <u>rabbits</u> , and their			
\	\	\	
5	6	7	8
<u>names</u> were — <u>Flopsy</u> , <u>Mopsy</u> , <u>Cotton-tail</u> , and <u>Peter</u> .			
\	/	/	V
9	10		
They lived with their <u>Mother</u> in a <u>sandbank</u> , underneath the			
/	\		
11			
root of a very big <u>fir</u> -tree.			
\			
12	13		
“Now, my <u>dears</u> ,” said old Mrs. Rabbit one <u>morning</u> , “you may			
/	/		
14	15	16	
go into the <u>fields</u> or down the <u>lane</u> , but <u>don't</u> go into Mr.			
V	/	\	
17	18		
McGregor's garden: your <u>Father</u> had an <u>accident</u> there; he			
\	\		
19	20		
was put in a <u>pie</u> by <u>Mrs. McGregor</u> .”			
\	\		
21	22	23	
“Now run <u>along</u> , and don't get into <u>mischief</u> . I am going out.”			
V	/	\	

トナリティの働きによって情報が細かく処理されているのである。また 32 や 36 においては関係代名詞の制限, 非制限という文法的な区別もしている。ここには明確な意味の違いが存在している。

トニシティの観点では, まずマーケットトニシティである。この朗読では, 27 と 28 において, また, 32 と 36 において対照のマーケットトニシティがある。27 と 28 の対照は内容をわかりやすく伝えようとしたものと考えられるが, 32 と 36 の対照は話者が特に強調しているところであると思われる。32 も 36 もニュートラルトニシティでもよさそうなところである。しかし, 話者はあえて *good* と *very* に焦点を置いているのである。36 は 32 での情報の焦点から考えても, Peter が本当にいたずら好きなウサギであるということがうかがえるところである。37 もマーケットトニシティである。ここも明確な意味の違いが現れている。ニュートラルトニシティならば *garden* に核が置かれるところであるが, ここは *straight* に核が置かれている。焦点を *straight* にすることによって, 「畑に飛んでいった」という意味が付け加えられている。54 もマーケットトニシティとなっている。ここは最後のレキシカルアイテムが旧情報となるため, ずれたものと思われる。60 は *dreadfully* に核が置かれたマーケットトニシティである。ここは「本当に怖かった」ということを強調したいためにここに焦点が当てられたものと考えられる。ここも意味が明確に変わっているところである。68 もマーケットトニシティである。ここは最後のレキシカルアイテムが旧情報となっているため, 焦点がずれたものである。

トーンズに関しては, 下降調が圧倒的に多く, 上昇調, 下降上昇調と続く。下降上昇調は単にイントネーション単位をつなげる働きをするだけでなく, 話者が何か含みを持って話しているところである。この朗読では 5 つ現れている。まず 7 において下降上昇調が現れている。5, 6 の列挙に続くならば 7 も上昇調でもよさそうなところである。7 においては次のイントネーション単位で物語の主人公である Peter が登場することからも含みを持った下降上昇調が使用されているところである。14 についても同様のことが言える。14 も「行ってもいいけれど…」といった意味になる。ここが

16 17 18
 | by horseback. | So that left me with the two babies, | and I
 \ / \ /

19 20
 really... | and I had the hotel, | which I sold, | and the
 \ /

21 22 23
restaurant, | which I sold. | I still lived in the hotel. |
 \ / \ /

24 25 26
 EJ: You had to run the hotel | and the restaurant, | then ? |
 \ / \ /

27 28 29
 Roddick: Oh, yeah, | yeah. | And so I decided to open a little
 \ / \ /

30 31 32
shop. | But I needed the | money for that, | so I remember | going
 \ / \ / \ /

33 34 35
 to the bank | and asking to borrow about | 4,000 pounds. | And
 \ / \ / \ /

36
 I... |

37
 EJ: How many years ago ? |
 /

38 39
 Roddick: That was nine years ago. | And he said, "No !" And I
 \ / \ /

40 41
 — you — and, | and no wonder, | 'cause I came into the bank |
 \ / \ /

42 manager wearing jeans | 43 and sweatshirts, | 44 and I had one baby

on my back | 45 and one baby in a push-chair. | 46 And I hadn't |

47 anything | 48 prepared; | 49 all the accountancy figures | weren't

50 prepared. | 51 So he said, "No, | 52 you can't have the money," | and

53 then I realized | 54 that I had to change, | 55 look respectable, | act

56 respectable | 57 and give him his accountancy figures. | So when I

58 presented him with those again, | 59 I got my 4,000 pounds. |

60 EJ: Is that for running | 61 this kind of particular | 62 — this kind

63 shop, | or just any shop? |

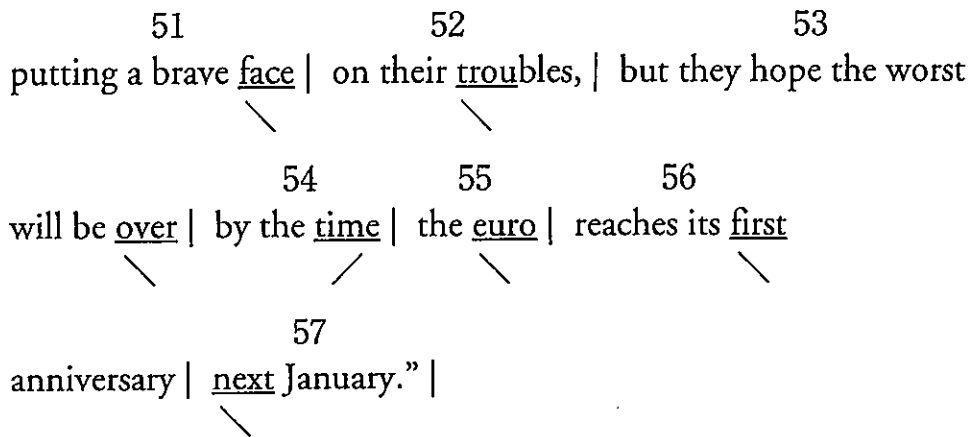
64 Roddick: No, | 65 it was for this kind of shop. | 66 I said I wanted | —

67 had an idea of selling | 68 skin care products | 69 by the ounce, | you

った」ということなのでここではそれが強調されたものと思われる。「ホテルを所有していた」と「所有することになった」というのとでははっきり意味が異なる。23 は *still* が新情報であったためにここに核が置かれたものと考えられる。41 もニュートラルで核が置かれるべき *bank* は旧情報であるため、*came* に核が置かれているものと考えられる。49 もマーケットトニシティであるが、ここも *figure* が旧情報として扱われているものと考えられる。57 も同様である。66 もマーケットトニシティとなっているが、ここは *idea* が新情報となっているのである。以上がマーケットトニシティであるが、旧情報であるのに核が置かれているところがある。56 の *respectable* である。ここは、話者が特に強調したかったところだと思われる。とにかく「立派に」ということを強調しているのである。このようにどこを強調して言うかということが発話の意味に影響してくる。

トーンズに関しては、インタビューの発話は 37 の発話以外、すべて下降調であった。下降調はドミナンスの発話で、話者は聞き手に *yes* か *no* で答えてもらいたいのではなく、聞いていることに対して意見を言ってもらいたいのである。デファランスの投げかけの発話ではなく、「意見を言ってください」というある種、命令的な発話となっている。それに対して、37 は上昇調を伴っている。これはインタビューがインタビューを受けているほうがまだ話の途中であるのに割って入ったところである。ここでのインタビューはデファランスの音調を使用することにより「質問してもいいですか」といった意味を込めたものと思われる。ただ「何年前ですか」と訊ねるのとは意味が異なる。下降上昇調は 4 つであった。そのうち、18 は次のイントネーション単位の間ポーズがあり、言い方も変わってしまったため、放棄単位と考えられる。49 はテーマを目立たせるものと捉えられる。53 も同様である。また 71 もテーマを目立たせるものであると捉えられる。下降上昇調に関しては以上であるが、このインタビューの中にはまだデファランスの発話が存在している。52 は文法的には陳述文であるのに、上昇調を伴っている。この部分は銀行の支店長の発話を再現しているのであるが、デファランスの発話にすることにより、「お金は貸せませんよ」という

percent in value | against the dollar, | enough to raise questions
 23 24
 \ \ \ /
 25 26
 | about the new single currency's credibility. | At this morning's
 \ /
 27 28
meeting, | the central bankers | will examine the outlook | for
 \ \ \ /
 29 30 31
 the euro. | Privately, | they accept it may remain weak | for
 \ \ \ /
 32 33 34
 quite a while. | The state of the German economy | is partly to
 \ \ \ /
 35 36
blame. | Growth in the continent's largest country | is poor. |
 / \ \ \ /
 37 38
 Some members of the bank's board | are trying to play down the
 \ \ \ /
 39 40 41
 problem. | They argue | that the weak euro | will at least make
 / \ \ \ /
 42 43 44
 German exports | cheaper | for the rest of the world | to buy, |
 \ \ \ / \ \ \ /
 45 46 47
 giving the stagnant economy | a boost. | As they celebrate | six
 \ \ \ / \ \ \ /
 48 49 50
months | of the single currency's existence, | they're certainly |
 \ \ \ / \ \ \ /



以上が、ニュースに関する分析結果である。イントネーション単位は 57 あり、そのうち下降調が 43, 上昇調が 4, 下降上昇調が 10 であった。

トナリティに関しては、短い時間で多くのイントネーション単位が確認された。短い時間で多くの情報を伝えている。特にイントネーション単位が細かくなっているところは、内容的に見ても、かなり強調されるべきところであった。17 から 21 まではイントネーション単位が細かく、最後の単位は 1 語のイントネーション単位となっている。情報を細かく分けることによって、強調しているのである。35, 36 に関しても同様のことがいえる。36 は *is poor* という 2 語から成るイントネーション単位であるが、*poor* ということ強調しているものと思われる。39 から 46 も同様である。2 語から成るイントネーション単位が 2 つある。情報の単位を細かくすることにより、わかりやすく伝えようとしているのである。

トニシティに関しては、ほとんどがニュートラルトニシティであった。意味に関わる箇所は見あたらなかった。

トーンズに関しては、下降上昇調の数が上昇調の数を上回っていた。これは意思伝達ということがニュースには存在していないためだと思われる。ニュースは一方通行の発話であるために話者と聞き手のやりとりは成立しないのである。まず、上昇調であるが、34 で現れている。前の 33 の発話が主情報で 34 の発話が副情報であると考えられる。上昇調で終わっているのは不自然であるが、副情報であると考えると、内容とも一致し、説明が

つく。49の上昇調についても34と同様のことがいえる。39と54の発話は未完の情報を示していると考えてよさそうである。下降上昇調はすべてテーマを目立たせる働きをしていると理解できる。ニュースでは、普通、含みは存在しないものである。

このように、ニュースはすべて情報のステータスの観点から音調を捉えることができる。情報の処理をし、情報のランク付けをしているのである。ニュースは情報のステータスの点で、Tenchの理論と合致していた。

5. 結論

先行文献研究では英語のイントネーションについて歴史的に見てきた。Sweetがイントネーションの働きに注目したのが始まりである。初期の頃は音調の分析が盛んであり、その後体系付けを試みるようになった。多くの研究者がイントネーションと文法の関係に注目し、文単位でイントネーションを体系付けようと試みてきた。その体系付けは次第に、イントネーションの機能の1つである、心的態度にばかり重点を置いたものへと変化していった。心的態度機能がイントネーションの働きのすべてであるような研究が多くなっていったのである。しかし、心的態度というのは、かなり微妙な面を持っており、研究者によって体系付けはさまざまであった。

こうした状況の中で、Hallidayは言語学的なイントネーション研究をした。彼は、文法的意味に関わる主要な働きである、tonality, tonicity, toneの3つを提案したのである。この画期的な提案がTenchに受け継がれ、さらに発展した。Tenchの体系付けが他の研究者と決定的に違うところは、イントネーションが明確に意味に関わる、文法的意味に関わるものであるということを示した点である。これまでの研究は心的態度などの微妙な面ばかりにとらわれており、文法的な意味に関わるという働きについては目が向けられていなかったのである。また情報の組織化、意思伝達機能の実現などはTenchが初めてイントネーションの機能として提案したものであ

る。情報のステータスとして主要な音調のランク付けをしたり、話者と聞き手との関係性におけるドミナンス、デファランスという機能を提案したりした。基本的な音調を、意味との関わりにおいて一般化したということは注目すべきことである。

今回の研究、分析においては Tench のトナリティ、トニシティ、トーンズ（トーンズに関しては、第二次音調は考慮に入れない）の理論で、発話の現象がほぼ説明できた。この理論は、かなり有力であるということがわかった。もっと多くのジャンルの分析をすればさらにこの理論が有効であるということが証明されていくことであろう。情報の組織化、意思伝達機能の実現という新しい機能は明確なものであり、また、重要な機能であるといえる。イントネーションが文法的な意味を変える機能を持っているということには、これまで Halliday, Tench 以外の研究者は触れていないが、今後のイントネーション研究はこのような理論を基礎として発展してゆくのではないかと予想される。この理論は、イントネーションが明確に意味を規定するという観点から体系付けられており、決して感覚的なものではないのである。

今回の研究では、Tench の理論のうち、第一次音調まではその理論が有効であるということがわかった。しかし、まだ心的態度機能については課題が残されている。Tench もこの心的態度については、第二次音調のところで議論してはいるが、体系付けには至っていない。この心的態度については、いろいろな観点から考察する必要がある、まだまだ発展途上の分野であるといえる。

- i レキシカルアイテム (lexical item) は「語彙項目」のことをいうが、Halliday は語彙項目について *yesterday / today / tonight* 等を語彙項目には含めずに、グラマティカルアイテム (grammatical item)ⁱⁱ、「文法項目」に含めている。しかし、*yesterday / today / tonight* 等は普通 lexical item に含まれるものである。ここでは *yesterday / today / tonight* 等はグラマティカルアイテムに含めることにする。そのため、本論文では語彙項目という訳語を使わずに、カタカナ表記を使用することとする。
- ii ここでは、上記のように、*yesterday / today / tonight* 等がグラマティカルアイテムに含まれるため、一般的な文法項目 (grammatical item) と区別するためにカタカナ表記を使用している。

参考文献

- Armstrong, L.C. and Ward, L.C. (1926). *A Handbook of English Intonation* (2nd edn. 1931). Cambridge: Heffer.
- Bolinger, D.L. (1986). *Intonation and its Parts*. London: Edward Arnold.
- Brazil, D., Coulthard, M. and Johns, C. (1980). *Discourse Intonation and Language Teaching*. London: Longman.
- Brown, G. (1990). *Listening to Spoken English*. 2nd edn. London: Longman.
- Brown, G. and Yule, G. (1983). *Discourse Analysis*. Cambridge: CUP.
- Cruttenden, A. (1994). *Gimson's Pronunciation of English*. 5th edn. / Revised by A. Cruttenden. London: Edward Arnold.
- Cruttenden, A. (1997). *Intonation*. 2nd edn. Cambridge: CUP.
- Crystal, D. (1969). *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge: CUP.
- Halliday, M.A.K. (1967). *Intonation and Grammar in British English*. The Hague: Mouton.
- Halliday, M.A.K. (1970). *A Course in Spoken English: Intonation*. London: Oxford UP.
- Halliday, M.A.K. (1994). *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edn. London: Edward Arnold.
- Jones, D. (1956). *The Pronunciation of English*. Cambridge: CUP.
- Kreidler, C.W. (1989). *The Pronunciation of English: a course book in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Ladd, D.R. (1980). *The Structure of Intonational Meaning*. Bloomington: Indiana UP.
- O'Connor, J.D. and Arnold, G.F. (1961). *Intonation of Colloquial English* (2nd edn. 1973). London: Longman.
- (片山嘉雄、長瀬慶来、長瀬恵美 共編訳 (1994). 『イギリス英語のイントネーション

ン』. 南雲堂.)

Palmer, H.E. (1933). *A New Classification of English Tones*. Kaitakusha.

Palmer, H.E. and Litt, D. (1939). *A Grammar of Spoken English: on a strictly phonetic basis*.

Cambridge: W. Heffer & Sons Ltd.

Pike, K.L. (1945). *The Intonation of American English*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Roach, P. (1991). *English Phonetics and Phonology*. 2nd edn. Cambridge: CUP.

Schubiger, M. (1958). *English Intonation, its Form and Function*. T. bingen: Niemeyer.

Sweet, H. (1906). *A Primer of Phonetics*. 3rd edn. Oxford: At the Clarendon Press.

Tench, P. (1990). *The Roles of Intonation in English Discourse*. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Tench, P. (1996). *The Intonation Systems of English*. London: Cassel

『ピーターラビットのおはなし』 アルク

『アルクカセットライブラリー・インタビューフラッシュ：ビジネス編』 アルク

『アルク CD ライブラリー・BBC ニュースフラッシュ 2000-2001』 アルク